来て！見て！図書館（としょかん）

開館時間
午前9時～午後7時

休館日
11月 2日(月)・4日(水)・9日(月)・16日(月)・24日(火)・30日(月)、12月 1日(火)・7日(月)・14日(月)

※休館日などの本の返却はブックポストをご利用ください。

●図書館●
佐間3―24―7(「みらい」内)
TEL:556―4227
FAX:555―3770

第11回図書館まつり

すみっコぐらし(映画)やおしりたんてい(アニメ)の上映、おりがみ工作など、さまざまなイベントを開催します。絵本のキャラクターになりきって来館したお子さんには特典もあります。また、当日はホットク、アメリカンロングポテト、タピオカなどのキッチンカーも出店します。

▶日　時　11月15日(日)午前10時～午後4時
▶場　所　図書館(一部中央公民館で実施)

図書館ホームページ

大人のためのミニ朗読会(図書館まつり)

▶日　時　11月15日(日)午後1時30分～2時40分(午後1時開場)
▶場　所　中央公民館第1学習室
▶定　員　70人(先着順)　▶協　力　行田朗読の会

絵本作家・ゆざわひろゆきとみんなでつくるワクワク絵本！

▶日　時　11月15日(日)午前10時～正午
▶場　所　中央公民館第1学習室　▶対　象　小学生以上(親子参加可)
▶定　員　20人(先着順)　▶持ち物　色鉛筆
▶申し込み　11月13日(金)までに市公式LINEまたは直接図書館

市公式LINE

読み聞かせボランティア養成講座(基本編)

▶日　時　12月6日(日)・13日(日)・20日(日)午前10時～正午(全3回)
▶場　所　「みらい」映像ホールまたは中央公民館第2学習室
▶講　師　小野寺るり子さん(おはなしボランティア指導者)
▶対　象　ボランティア活動を希望し、3日間参加できる方
▶定　員　10人程度(先着順)
▶申し込み　11月3日(火)～17日(火)に行田市電子申請・届出サービス、直接または電話で図書館

電子申請・届出サービス

行田歴史系譜 392 資料がかたる行田の歴史 92

近代の足袋産業を支えた印刷技術

郷土博物館では足袋産業の資料を常設展示していますが、中でもたびたび反響をいただくのが足袋のペーパ（商標ラベル）です。「デザインが可愛い」「手元で眺めたい」といったお声があり、そのデザインは現代人の目にも魅力的に映っているようです。これらのペーパは、足袋屋がそれぞれ自社の商標を用いていたため、膨大な種類が存在し、その印刷需要を満たすべく地元の印刷業者が活躍してきました。印刷業は、近代以来の足袋産業を支える重要な仕事の一つなのです。

近代のペーパ印刷で使われた技術の中に、石版印刷（リトグラフ）というものがあります。石版印刷は幕末に西洋から持ち込まれた新しい技術で、平版印刷の一種に分類されます。まず、平らな石灰石の表面に油性の描画材料で図柄を描きます。それを薬剤で処理してから水で濡らすと、図柄の上にだけ油性インクがつき、他の部分は油性インクを弾くようになり版が完成します。つまり、木版のように凸凹を彫るのではなく、薬剤の化学反応によって版を作るのです。石版印刷には、鮮やかな画像を短時間に大量印刷することができるという利点があり、大量に出荷される足袋のペーパ印刷に採用されたのも頷けます。


平版印刷用石版（郷土博物館蔵）

郷土博物館では近年、足袋のペーパ印刷に使用されたとみられる石版石を収蔵しました（画像参照）。印刷業を営んでいた今津家の敷地内から出土したもので、大小合わせて5点が見つかっています。使用年代や場所は不明ですが、版には新町にあった大澤専蔵商店のペーパなどが含まれ、行田足袋のために使われたものであることは間違いないでしょう。行田足袋の隆盛を支えた技術、その一端を物語る貴重な資料と言えます。

ちなみに、石版石は非常に重いです。画像の石版石は版面がおおよそA5サイズ、厚さが5センチメートルほどで決して大きくはないのですが、計ってみたところ3・4キログラムもありました。石版石にはさらに大きなものもあり、日常的に取り扱うのは大変だったでしょう。先人たちの仕事には頭が下がります。

（郷土博物館　岡本　夏実）

いき いき 行田人（ぎょうだじん）

見えない壁を乗り越えた先に

中野　希彪さん（栄町・15歳）





今月は、8月に沖縄県で開催された「第10回全国盲学校フロアバレーボール大会美ら風沖縄大会」に関東地区代表チームのメンバーとして出場し、全国優勝を果たした中野希彪さんを紹介します。

中野さんは先天的な弱視の特性もあり、市内の小学校を卒業後、埼玉県立特別支援学校塙保己一学園中学部に進学しました。中学生になって何かに挑戦してみたいという思いもあり、球技部に入部しフロアバレーボールを始めたそうです。

フロアバレーボールは、全盲や弱視の視覚障害を持つ人と健常者が一緒にプレーできるように考案されたパラスポーツの一つで、チームは前衛と後衛各3人の計6人で構成されます。前衛の選手はアイシェードなどを着用し、何も見えない状態でボールの転がる音や後衛からの指示を聞きながら動き、後衛の選手は見える状態で前衛の選手にボールの位置やブロックの位置などの指示を出しながらプレーします。

当初は弱視だったことから後衛としてプレーしていましたが、先生からの提案で前衛に転向。すると爽快なアタックやブロックなど前衛としての力が開花しました。「完全に視界が遮られることで、余計な情報が入ることが無くなり、相手の選手やボールの位置が頭の中でイメージしやすくなった」と語る中野さん。一方で、思うような結果が出ず、部活動に行きたくない日々が続いたこともあったそうですが、友人や先生、部活動のOB、家族などに支えられながら努力を続けた結果、全国優勝することができました。

また、趣味でドラムを習っており、フロアバレーボールで行き詰まったときはドラムを叩くことでストレス解消にもなっているそうです。そして、いずれはバンドを組んでみたいと、新たな目標も持っています。

中野さんは、自身の経験を踏まえ「もし障害を持っていることを理由にやりたいことを諦めている人がいるなら、無理と決めつけずに一度挑戦してから判断してほしい」と話します。目の前の壁を乗り越えるたびに強くなる。その確かな歩みが、中野さんの無限の未来を切り拓く原動力になります。

俳行 壇田（ぎょうだ はいだん）

俳句応募方法

一人3句以内。住所・氏名(ふりがな)・電話番号を明記の上、はがきまたは封書で広報広聴課まで。

※毎月末日必着

なお、一部添削して掲載する場合がありますが、不要であれば「添削不要」と記載してください。

噛み合わぬ会話の後のソーダ水　小見　川島　盾子

【句評】昭和時代のデートの定番は映画を見た後に喫茶でソーダ水を飲むことであった。掲句は昔懐かしい一シーンを思い出させてくれるような一句である。作者の意図は違うところにあるのかも知れないが、俳句という文芸は解釈がさまざまに広がる句が佳句とされる。懐古的な情景なのになぜか新鮮味さえ覚える。ノスタルジーの一句といえるだろう。

天高し学びの場なりデイ施設　谷郷　森　洋子

【句評】人生百年時代と言われるほどの長寿社会となった日本は老後の介護サービスもさまざまなものが用意されており、デイサービスもその一つである。作者はそのサービスを利用しながら、そこを「学びの場」と前向きに捉えているのである。しかも「天高し」の季語を配し、ややもすれば後向きになる老後の環境をものともせず胸を張って見せたのだ。

おばちゃんの本領発揮秋セール　棚田町　奈良佐智子

【句評】原句は「秋セール一目気にせぬ自分好き」というものであった。これでも句意は伝わるが、下五の「自分好き」がやや気取りすぎ。金子兜太は常々「俳句は諧謔(ユーモア)である」と言っていたが、掲句の背景はまさに諧謔に富んだ情景であり、思わずずっと笑える詠嘆にした方がよい。世知辛い世をたくましく生きぬく一端を見事に捉えた一句である。

ほどほどに孤独秋海棠の花　緑町　松林　真弓
糸瓜忌や野球は今や国技なり　持田　小倉　繁三
秋澄むや審判コール高々と　富士見町　江利川敏夫
走り蕎麦香りほのかに運び来る　忍　大澤　由子
農やめてそっと稲穂に触れてみる　下忍　荒井　王子
この辻のこの位置が好き遠花火　矢場　島田　健治
縁先の供物肴に月見酒　谷郷　羽石　芳道

（三沢一水 選評）